

感覚を働かせて学ぶ子供たちから

主幹教諭 松井 直樹

緑が目眩しく鮮やかに感じられるよい季節となりました。5月の大型連休明けから、本校では各学年において校外学習がスタートしました。今月は1～3年生の遠足、そして4～6年生の移動教室を実施します。新しい学年になり、学年目標及び学級目標に向かって、そして何よりも自分自身の成長を目指し、その成長を実感する貴重な時間をとるのではないかと考えます。

さて、私は5月9日に3年生の遠足に引率いたしました。3年生の遠足の内容は、西武池袋線の高麗^{こうま}駅から歩いて日和田山に登り、降りてきてから、今度は高麗川^{こうまがわ}沿いの巾着^{きんちやく}田で遊びます。日和田山は300m程の山ですが、急な男坂を助け合って登ることから、山登りの醍醐味を小学生でも味わえる山です。私は、子供たちよりも少し早く日和田山頂上に向かってトレイルラン！それは、恒例となった山頂での「氷砂糖渡し」をするために登頂するためです。私が登頂した後、しばらくして子供たちが次々に登頂しました。頑張^{がんば}って登ってきた子どもたちの「うんまーい」（氷砂糖の甘さが格別だったようで口に含みながら発したおいしさの表現）という言葉と満面の笑顔に私の疲れも吹き飛びました。

3年生は登山やその後の巾着田でのハイキングやクラス遊びを通して、あっというまの時間を過ごしました。3年生の遠足での道中、子どもたちは歩きながらも様々なことに気付きます。「鳥の鳴き声がする？初めて聴いたよ、この鳴き声」で空を見上げたり、「この葉っぱきれい、うらから見ても・・見て見て」「なんかにおいがする、どこから、あっ、この花かな」としゃがみこんだりするなど、その場で感じたことを思い思いに話し出すのです。このような姿は、まさに子どものみならず人間が本来もっている感覚を働かせている様子と言えるでしょう。一般的に五感（ごかん）とは、多種類の感覚機能のうち、代表的に視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚をさします。いずれも人間など動物が外の世界を感知するためのものです。遠足や移動教室などの学校行事は教育課程の中の一つですが、日常の教室以上に自然という教室で子どもたちの様々な感覚を働かせることができます。頂上での「うんまーい」も自分の味覚を大きく働かせた子どもが素直に発した感覚による言葉でしょう。子どもたちは、自らその感覚を働かせるために対象に近づき、多様な感じ方をすることが3年生の遠足から感じられます。子どもたちには遠足、移動教室月間でもあるこの5月にぜひ自分の様々な感覚を働かせてほしいです。また、御家庭でもそのような機会を設けていただければ幸いです。さらに学校では、子どもたちに自分以外の他者に対する感覚にも目を向けさせ、本校が今年度重視する「きれいな言葉」「人の気持ちを考える心」について指導してまいります。「大丈夫だよ、ぼくが先に降りてみるから、ゆっくりそこに足をおいてごらん」日和田山を下山する際に発していた3年生の相手を思いやる言葉と行動にその思いを強くしました。

